
この感情は

小田桐砂月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この感情は

【Zコード】

N7713M

【作者名】

小田桐砂月

【あらすじ】

組織壊滅後、解毒剤が完成しなかつたその後の話です。
高校生の「哀になります。苦手な方はご遠慮ください。

望まなかつた未来

組織は壊滅できた。

しかし余りにも時間をしてしまった。

組織の場所を掴むだけにも関わらず3年。情報戦線となり錯乱を行うまでに2年。

乗り込んだ時には気がつけば5年を過ぎていた。

たかが5年されど5年。17歳だった彼も22歳になっていた。

組織のメインコンピューターにアクセスし、さあアポトキシン4869の情報を引き出そうと試みた。

しかしそこには何も存在しなかった。

情報が全てが消されていた。

まるで私たちが乗り込むのを予想していたかのようだつた。

それでも組織が抹消するはずがないと、奮い立たせ知り得ている情報全てを導入させたが無駄な足掻。

あまりにも遅すぎたのだ。

彼は何も言わなかつた。責めてくれたほつがどんなに楽だつたか。

「ありがとう。これで前に進める」

そう話した彼の姿はどこかサッパリして見えた。

それからは何事もなかつたかのように時は進んだ。

気がつけば小学生だつた学年も今では高校2年生までになつてゐる。

アイボリーのトレーニングート、スキーパンツにブーツスタイル。
どこぞの○し出勤服などと揶揄されるが、着なれた服装を選ぶと自然とこうなつてしまつ。

周りの同級生は、私服校にも関わらずあえて制服っぽい服装を選んでいるから余計だ。

その為何だか異質な雰囲気になつてしまつ自分の存在。まあ存在自体が異質だからピッタリなのかもしれない。

帝丹小学校・中学を卒業しエスカレーターに反し外部受験をした。
違う環境に口を開きたかった。

ただそれだけ。

都立高を選び通い始めたが、自由な校風は案外この気質に合つているようだ。

しかし予想外の事があった。

彼も外部受験をここに通つていて。

何も言わず、卒業し入学したはずだったのに彼はそこにいた。

隣人で同じ学校、そして同じクラスでは避けるのは余りに不自然。つまらない事と分かっていても悩んだ。
しかしそんな悩みを打ち消すかのように、彼はさも当然のように側にいた。

窓辺から見える景色は、夕刻の闇が支配している。

揺られる列車は満員で溜息しか出ない。

押し潰されそうな車内に辟易していたが、慣れてしまえば諦めもつくし対処法も心得ている。

身長は幸運にも高めのため息苦しさは免れています。

突然の急ブレーキに車内がざわめく。赤みがかつた茶髪が胸元にかかる。

これまで肩口で揃えていた髪を伸ばし始めたのはいつからだったか・。

「灰原大丈夫か？」

頭上から声をかけられる。

「大丈夫よ」

視線をやや上げ表情を変えずに答える。
彼は一度目の学生生活を案外楽しんでいる、側から見れば、
絶対180越えすると宣言し規則正しい生活を心がけているせいか、
前よりも確実に伸びている。

暫くすると車内放送が響き渡り乗客の溜息と不満の声が合われる。

時刻は午後6時前、長い一日になつそつと諦めた。

Long Way To Home

「やつちまつたな、これは。」

どこか悲しげに、そしてやり切れなさを抱えた表情を浮かべている。未だに運転再開のアナウンスはないので、現在確認中なのだろう。大体の事が予想がつくのは、やはり彼も同じなのだ。

「恐らくね。多いわよこの時期、防げる物なら防ぎたいわ」車外へと目線を向けながら、恐らくもう居ない誰かを想う。何があつたのか、何がそつしたのか。

あまりにも平和ボケしてしまった私の頭は役には立たない。処理しきれない感情の渦だけが空しくそこに立ち込める。

「だよな。灰原見に行くか？」

「缶詰状態じや動きたくても、身動きとれないわ。出来ることと言つたら暖房を消される前に防寒する位かしら。」

そう答えたはずなのに、なぜか彼にドア側へと抱き寄せられた。これではもつと動けない。

不満げに見上げるが、この方が懸命だろと言つてるかの表情で聞き入れられない。

車外へ降りる許可が出るまで時間がかかる。この進み具合では恐らく50分位はかかるはず。

今後は車内の電気を消されるだろう。ラッシュ・混乱に生じて犯罪が起こりやすい。

そう考えると無下に彼から逃げる事も出来ずその好意に甘える。

次第に車内にアナウンスが響く。

「人身事故がありました。指示があるまで決して線路へは下りないでください。
レスキュー隊などの作業の妨げにならない様、車内の電気を消します。

お忙しい所ご協力宜しくお願ひします。繰り返します・・・・・」

車内の電気系統全てが消され暗闇と化し、暖房も切られ冷氣ドアの隙間から入ってくる。

次第に目が慣れ周りの様子をうかがえる。平然としているもの、動搖しているもの様々である。

携帯電話の液晶画面が所々で明るく光っている。家に待つ者へ連絡しているのだろう。

私を待つ人は今はいない。海を隔てた場所アメリカで暮らしている。博士がアメリカに旅立ったのは、高校入学前。

高校進学と同時に家を出ようと思案していた時だつたので慌ててしまつた。

私の存在が邪魔なら出て行くから、この家に居てと伝える私に違うんだよ哀くんと微笑んでいた。

研究が認められ、アメリカに拠点を移すのだと言われた。

この日本で、灰原哀として楽しんで生きてほしいこれが私の願いだよ。

博士の好意に甘え、現在も居候?正確には家主の居ない家の留守を守らせてもらつている。

「お待たせ致しました。係員の指示に従い順番に下車してください。夜間の為足元に注意しお進みください。慌てずじゅうくの移動をお願いします。」

線路沿いに簡易の灯りが取り付けられ、長い人々の列が駅ホームまで続いている。

恐らくホームまでは距離にして1キロ弱はある。思いのほか結構な距離があるのでねと考えながら進んでいく。

都内なので比較的1区間は短いはずだが、ここはどうやら違つたらしい。

「停車時間案外長かつたな。この分だと家に着く頃には8時前になるな。駅についても電車はビュウせ止まってんだろう。」

北風舞う線路沿いを歩きながら、寒いのか肩を少しずくめている。彼は茶系のモッズコートに厚めのパーカーを着ているが、突然の寒空の下では堪えるらしい。

そんな彼を気にしつつも、どうじ様もできないことなので無理やり視線を外す。

「そうね。遅くなっちゃったわ。帰つたら急いで夕飯に・・・あ、でもその前に買い物しないと。」

冷蔵庫の中身を思い出し慌てる。明日行けば大丈夫と楽観していた。

「買い物はしようぜ。でもせつかくだから食つて帰ろつ。温かいやつ。」

江戸川コナン、是が非でもおぼりせて頂きます。毎日作つて頂いてるので、たまには息抜きも必要だと思うんです俺は。」

どこか茶化しながら、楽しそうにあれこれとメニューを提案していく。

る。

そんな彼の姿を見ていると、たまには良いかしりと思えてくるのだから自分の現金をに呆れる。

ホームに辿り着く頃には鍋にしようつと決まった。
改札口を出て、ロータリーを後にし線路沿いに進んでいく。
金網越しに見る線路には、一向に電車が動き出す気配は感じられない。

いつのまにか自然と隣同士で歩いている。

夜空にはオリオン座、この寒さで比較的見やすいのだな。

「灰原学部決めたか？志望校は曖昧でもまだ許されるけど、学部は逃げられないらしいぞ。」

鞄に入った未記入の行き場のない進路調査票を思い出す。先週配られたが、鞄から出されることなくそのまま。

「理系つてといふまでよ。」

「灰原さん、理系クラス在住かと思われるんですけど・・・。
それで文系つて言われた方がビックリです。文系？文系？理系のクイーンがつて。で、何学部？」

普段なら決して聞いてこない質問に答えを詰つべきか、悩んでしまひ。

中学の時は適当にはぐらかし過ぎしてきたが、今回も上手くこぐま

は限らない。

漠然と思う事はある。この高校を選んだのもその選択肢を考慮したからだつたりする。

人々を殺める薬を開発した過去。

消え失せない罪。

少しでも人を救いたい、そんな想いがどこにある。

助けられる命があるならば・・・。

宮野志保の時に医師免許は取得していない。アメリカで知識は得たが、臨床に立つことがほとんどなく終わっている。

必要なのは研究における知識であつて、現場で人を救う知識と技術ではなかつたのだ。

そのため、よりこの思いは強いのかもしれない。

どう言えばいいかとかと迷つたが、彼の事。隠しても無駄だらつ。

朱に交われば

「医学部よ。ただ、ちょっと資金調達に励むから入学は一年程遅れるかしら。」

博士は哀くんが進みたい道ならばと学費は気にするなど言つてくれている。
しかしそれは余りに図々しい為断つている。

医学部に向けての受験科目は特に問題ないだろ。

高校の授業も受験対策として、2年までに範囲を終わらすカリキュラムになっている。

試しに本屋で見かけたセンター試験の過去問もこんなものかとすぐ閉じてしまった。

クラスメイトに誘われ模試を受けてみた事がある。

模試・授業が無料という主催者側からのカードが送られてきていたので大丈夫だろ。

学費を奨学金を使ってと視野に入れたが生活費も捻出する必要があると考へれば、

まとまつた金額を手に入れてからが理想だろ。

幸い手元に新薬候補案が数件あり、これを元に稼働かと田論んでいたりする。

学生と同時進行でも出来なくはないが、真剣に医学の道一本で集中したいと思つている。

「やっぱ医学部だと思つてた。1年遅れるつて、学費と生活資金の心配してるんだろ?」

正解、某司会者の真似でもしようかと思つたが、直ぐに打ち消し沈黙が訪れる。

電車が走らない夜は、これ程までに静かなのかと驚かされる。聞こえるのは風音、そして彼の吐息だけ。

沈黙を破つたのは彼だつた。

「飯早めにするか？なんなら道一本向こうにあるんで。」

話題を変えようとしてくれているのが分かる。正直有難かつた。今は触れてほしくなかつたから。

「そうね。そうしましょ。」

足早に目的地へと向かう。そこは国道沿いにある白木が眩しい日本家屋を模した店だつた。

暖簾をくぐり店内へと入る。暖房の利いた店内は冷えた身体にはとても心地いい。

威勢のいい店員の声がきこえ、座敷席へと案内される。こんな時私服校で良かつたと思つ。違和感なく店内に入れるのだから。

メニューを開きながらああでもない、こつでもないと検討してしまつた。

「江戸川君本当にカレーが好きね。」

満足そうに鍋をつついている彼を見ながら、少々呆れつつも言わずにはいられない。

選ばれたメニューはスープカレー鍋だった。よくキャンプでよく食べてていたカレー味である。

「好きですよ。誰か知らないけどカレーを鍋に入れようと思った人はマジで尊敬できるって。

灰原？聞いてるか？あれ、灰原さん引いてる？」

実際に楽しそうに話していくのでつられて笑ってしまう。

湯気が立ち込める鍋には白菜やネギ、鶏肉などが所狭しと入っている。

香辛料の香りが立ち込め鼻腔を刺激する。

昔は箸の直箸に嫌悪感を覚えたが、今では抵抗なく鍋を食べられるようになっているので
案外適応力があるのかもしねり。

他愛のない話をしながら食べていると、いつの間にか終わりに近づいていた。

最後にご飯を入れ雑炊にしてもらい綺麗に完食し店を後にする。
宣言通り彼に御馳走になった。

ここから自宅までは歩いて20分程で着くだろう。

買い物をする予定だったので、近場のスーパーへと寄つてもらう。
24時間営業と言えばコンビニが主流だったが、いつのまにかスーパーマーケットまで台頭してきている。

それは米花町でも例外ではないようで、徒歩圏内にありお世話になつている次第である。

店内に入れば、仕事帰りのサラリーマンから年輩の方まで様々な人

々が訪れている。

陽気な音楽が鳴り響く店内は賑やかで、どこかホッとした。かっこを持ちさあ何を買おつかしらと、陳列棚眺めていると横からかっこを奪われた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7713m/>

この感情は

2010年10月15日00時48分発行